

京都大学山本天文台資料の東日天文館関連資料について

嘉 数 次 人 *, 小 川 誠 治 **

概 要

東京有楽町に1938(昭和13)年にオープンした東日天文館(後に、毎日天文館に改名)は、大阪市立電気科学館に次いで日本で二番目にオープンしたプラネタリウム施設で、カールツァイスⅡ型プラネタリウムが導入された。東日天文館は1945(昭和20)年の東京大空襲によって破壊されたため、活動期間は短く、また資料類もほとんど残っておらず、不明な部分が多い。そんな中、京都帝国大学教授であった山本一清旧蔵資料の中に、東日天文館の資料がいくつか含まれていることを発見した。

今回、それらの調査を行ったので、取り急ぎの報告を行うとともに、資料から明らかになった点や、資料発見の意義を考察する。

1. 東日天文館

東日天文館(後に、毎日天文館に改名)は、大阪毎日新聞社東京支社の社屋(東日会館内)に設置されたプラネタリウム施設で、1938(昭和13)年11月2日に披露開館式が開催され、翌3日から一般公開を開始した。カールツァイスⅡ型が設置されたプラネタリウムドームのほか、各種資料を展示した展示場も併設されていた。また解説者の中には鈴木敬信、野尻抱影がいたことも有名である。1943(昭和18)年1月1日には、東京日日新聞社が毎日新聞に改名し、これに伴って東日天文館も毎日天文館に改名している。同館は、戦争が始まった後も開館し投影を続けていたが、1945(昭和20)年5月25日の東京大空襲によって焼失してしまった。

このように、わずか8年間で活動の幕を閉じた施設ではあったが、河原郁夫氏が、「東日天文館の解説は、ポインターで地上の風景を示した後、星座解説、今月の天文の話題、というスタイルであり、五島プラネタリウムがそれを踏襲しました。この解説スタイル、音楽、メカなど戦後のプラネタリウムの解説のお手本となりました。最初に解説者が、『この機械はドイツ製で、カール・ツァイスⅡ型、世界で26番目の機械』と言っていました。私の恩師でもある故・水野良平先生や大谷豊と先生、小林悦子先生など多くのプラネタリウム解説者を育て

た、いわば大恩人といえます。もちろん私もその一人です」⁽¹⁾と、インタビューで答えているように、戦後のプラネタリウムの解説や解説者の育成に多大な貢献をしたプラネタリウムでもあった。

しかしながら、短い活動期間と、空襲による消失のため、詳しい資料がほとんど残っておらず、不明な部分が多いのが現状である。

2. 発見された資料の概要

山本天文台資料は、京都帝国大学教授であった天文学者山本一清(1889～1959)の旧蔵資料で、京都大学に寄贈された資料群の名称である。筆者の一人(嘉数)は、2017年2月に京都大学の山本天文台資料室を訪問して調査を行った際に、東日天文館資料を発見した。今回確認できたのは、以下の2件である。

①資料番号 2obs1f-57-6: 東日天文館プラネタリウム関連資料(昭和15年)

②資料番号 2obs1f-57-8: 東日天文館開館記念式典関連書類(昭和13年)

これらはそれぞれ1通の封筒で、その中にいずれも複数の資料が入っていた。その中には、これまで知られていなかった新資料も含まれていたため、もう一人の筆者である小川との共同研究とし、小川が既存資料との比較と考察を中心に担当した。

そこで本稿では、それらの中で特に貴重と思われる資料をいくつかピックアップして報告すると共に、東日天文館に関するいくつかの点について考察を行う。

*大阪市立科学館 学芸員、中之島科学研究所 研究員
kazu@sci-museum.jp

**渋谷星の会、東日・五島の遺産を記録する会

3. 山本天文台資料からみた開館時の東日天文館

前述した①、②の2件の資料のうち、②の「東日天文館開館記念式典関連資料」は、1938年の開館時の資料をまとめたものである。では、開館時の様子を、資料から辿ってみよう。

3-1. 山本一清と東日天文館

山本一清は、東日天文館の計画段階から協力を行っていた。この事は、山本天文台資料中にある、1938年3月21日付けの東亜天文協会急報第283号に、以下の様な記述があることから明らかになる。

東京にもプラネタリウム

東京日日新聞社では、豫て計画中のプラネタリウムを愈々同社屋新築中の第6階に建設するに決し、経20米のドームの鉄骨組立てに着手した、尚ほ此の廣大な隣室を天文陳列館とすることも決定、全部山本一清博士を顧問として工事設計画を進めているプラネタリウム投影機は既に購入済、本年の秋に開館の筈⁽²⁾

つまり、東日天文館のプラネタリウムと天文陳列館の設置に関する顧問を務めていたのである。ただし、具体的な協力内容を示す資料は見当たらなかった。

また、今回発見された資料には、東日天文館が1938年11月2日に開催した「開館式」に関するものが含まれていた。式典の詳細は後述するが、山本一清宛の開館式招待状⁽³⁾が現存しており、招待されていることが確認できる。また、開館記念として配布された記念品や、式典時に身につけたと思われる来賓用の徽章などが資料中にあるので、実際に式典に参加したと考えてよいだろう。

3-2. 東京日日新聞の東日天文館竣成記念号

東日天文館は11月3日に一般公開されるが、その前日である2日には、東京日日新聞で特集記事が組まれている。今回発見された資料の中に、「東日天文館竣成記念号」と題された、11月2日付東京日日新聞の第九面から第十六面がある(写真1)。これら全8面の紙面のうち、天文館および天文に関する記事があるのは、第九面から第十四面である。

第九面は、東日会館の建物全景とカールツァイスプラネタリウムの写真が大きく掲載され、「東日天文館竣成記念号」と大きく書かれている。また紙面右下には「東日天文館竣成の辞」と題した記事がある。続く第十面は、「驚異のプラネタリウム」という見出しの下、プラネタリウムのメカニズムや機能を紹介する記事が続く。第十一面には、「東日会館の「天象儀」で見られる 昔



写真1:昭和13年11月2日付東京日日新聞第九面

話や伝説から生れた面白い星座の名」と題された野尻抱影の記名記事や、「宇宙にある星の数一千億箇余り 太陽はその中の一つ」と題された上野科学博物館鈴木敬信の記名記事などが見られる。また十二～十三面は一つながりの記事になっていて、「近代文化の殿堂 東日会館の全貌」というタイトルで建物外観図と各階の外観図が示されている。そして「東日会館について」という見出しで、建物全体と各階フロアの説明した簡単な記事も紹介されている。そのうち、天文館に関係するフロアについて見ると、以下の様な記述になっている。

【六階】天文館(天象儀室、天文科学館、休憩室、開館事務室、電話交換室、貴賓室)

【七階】天文館上部、豊田自動車株式会社、満州工廠、大日本体育協会、機械化兵器協会

【八階】天文館上部、食堂、厨房、談話室、日本工業会

【屋上】塔屋、昇降機械室、水槽室、将来は天文観測所

さらに、十四面には、「戦争と天文知識」をテーマにして、小島時久陸軍少将と秋吉利雄海軍大佐、中村清二東大名誉教授による記名記事もある。

さてここで、本資料の性格を考えてみよう。第九面から第十六面であるから、11月2日に発行された新聞の一部分であることは明らかである。しかしながら、第九面の右上に「東京日日新聞」のマークと発行人、発行所が掲載されており、また「竣工記念号」という見出しもあることから、一見すると独立した紙面という印象も受ける。従って、東日新聞社は当初からこの部分だけを抜き出して配布しようと思図していたのではなかろうか。また、山本一清が所蔵していたという事は、恐らく開館式の招待者に配布されたものと考えられる。

3-3. 東日天文館開館記念の配布物

さて、11月2日の開館式は、午前10時から同館にて開催された。この時の出席者に配られたであろう配布物が、今回発見された(写真2)。それは、「開館記念贈呈 東京日日新聞社 東日会館」と書かれた封筒の中に入れられており、以下の6点があった⁽⁴⁾。

- ①東日天文館開館式 式典次第 1枚
- ②開館記念 天文展覧会出品目録 1通
- ③パンフレット「プラネタリウム 天象儀」1通
- ④パンフレット「十一月の天文館」1通
- ⑤冊子『星と宇宙とプラネタリウム解説』1冊
- ⑥東日天文館絵はがきセット 2種類

これらの内容から、開館に際して十分な準備が行なわれた様子が伺える。



写真2: 東日天文館開館式の招待状と配布物等

3-4. 開館式

では、開館式はどのようなものであったか。上述の配布物の中の資料①「式典次第」⁽⁵⁾を見てみよう。

それによると、式典は今尾事業課長の司会によって進められた。まず大阪毎日・東京日日新聞社の高石眞五郎会長、東日天文館建設会長の鈴木孝雄陸軍大将の式辞があり、その後、東日会館専務取締役の前田久吉⁽⁶⁾による経過報告が行われた。続いて、近衛文麿首相、荒木貞夫文部大臣、米内光政陸軍大将、

ドイツのオット大使からの祝辞があり、閉会となっている。その後、午前11時からプラネタリウムの投影があり、正午から八階大食堂にて祝宴が開かれている。

その内容は、11月3日付けの東京日日新聞夕刊の記事内容⁽⁷⁾とも一致しているから、プログラム通り開催されたようである。また、この時のプラネタリウム解説の内容は同紙の第二面に以下の様に記されている。

午前十一時四百名の名士はプラネタリウムの大ドームに入り、この日の説明者科学博物館鈴木技師の説明でいよいよ実演に入る、ほんのりと明るかつたドーム内に夜が訪れて天井の一隅にキラリと宵の明星が光つたと思ふと次々に無数の星が輝きはじめ、間もなく全くの夜となつて、戸外が晩秋の明るい昼間であることを忘れてしまふほどの見事さだ、かくて主要な星、星座の説明、日周運動、太陽、惑星の運動の説明に続いて一挙に南極の空に飛び再び東京の空に還って爽やかな音楽とともに清しい朝を迎えて四十分の実演を終れば万雷のやうな拍手が起る⁽⁸⁾

この記述には、解説担当者は科学博物館の鈴木技師とあるが、これは鈴木敬信のことである。

さて、開館式は記念式典、プラネタリウム見学、大食堂での祝宴と続き、午後1時前に散会となったが、天文館ではその後も招待客の対応をしており、「更に午後一時、二時、三時の三回に分けて約千五百名の人々を招待してプラネタリウム(天象儀)の供覧に供し、同様八階大食堂で乾杯、高石会長、奥村社長の挨拶に対し夫々来賓から謝辞があつた」⁽⁹⁾。つまりVIPを招いた開館式は午前10時から正午過ぎで終わっているが、天文館ではその後も時間を決めて関係者等を招待していたことが知られるのである。

3-5. 天文展覧会について

開館時に配布された資料に、開館記念の天文展覧会の出品目録がある。この展覧会の開催について、11月3日付の東京日日新聞夕刊には、

来賓諸氏は先づ本社員から配布された参考書類を読みながらプラネタリウム付属の天文展覧会場を一巡する、とつつきにある伊能忠敬翁作の象限儀に先づ目を奪はれ、続いてわが国古来の各種天文文献に驚きの眼を注ぎながら会場内の模型天体のボタンを押して

「ホウ、北斗七星はあれぢやナわしや初めてお眼にかゝつたよ」

などと一度に子供の昔に還る、⁽¹⁰⁾

とある。この記述から伊能忠敬が全国測量で使用した象限儀が展示されていたこと、また星空を紹介する模型が展示されていたこともわかる。

さらに、今回発見された資料の一つには、展覧会の出品目録がある(写真3)。

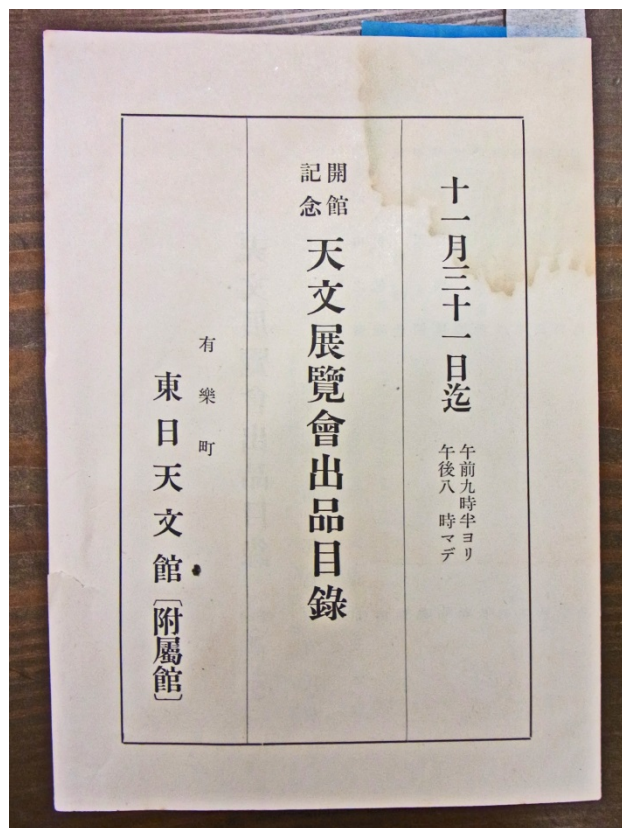


写真3:天文展覧会出品目録表紙

これは一枚の紙を四つ折りにしたパンフレットで、表紙には「開館記念 天文展覧会出品目録」とあり、また「十一月三十一日迄 午前九時半ヨリ午後八時マデ」、「有楽町 東日天文館〔附属館〕」という記述も見られる。ここから、展覧会は11月31日までの開催であったことがわかる。さらに、出品目録には展示資料名と点数、出品者も記されており、合計96点をかぞえる。それらは巻末の表1としてまとめておいた。

ちなみに、伊能忠敬所用の象限儀は、出品目録には写真のみの出品となっているが、先に引用した新聞記事には「伊能忠敬翁作の象限儀に先づ目を奪はれ」とあるから、実際には実物が出品されたのであろうか。また、出品目録を見ると、惑星比較模型、星座説明模型、日月食の説明模型、日時計については簡単な解説文もあるので、ここに引用しておく。

惑星比較模型

惑星は最小の水星から最大の木星に到るまでかなり大きさを異にする。この惑星を正しい比率で模型を作り、各々の週期で自転するやうにしたも

のである。惑星の大小、自転の遅速などを一目でよく呑みこめる。

星座説明模型 八個

天を東西の線で二つに切り、北の空と南の空の星をそれぞれ四半球の内面に現はし、背面から電灯で照らして光らせるやうにしたもの、プラネタリウムで覚えた星座を確実に覚え直し、自己のものとするのに至極適当なものである。

日月食の説明模型

如何なる場合に日月食が見られ、如何なる場合に見られぬか、模型によって説明したもの、皆既日食、金環食、部分食などの起る場合の差異もよく理解できる。

日時計 七個

各種の日時計を大きく作りその様式の差異を明瞭に示したもの。⁽¹¹⁾

4. 山本天文台資料の検討

以上で紹介したように、山本天文台資料の中から発見された東日天文館資料は、同館の開館時の様子を知ることができるものとなっている。

従来、開館当時の様子に関する資料としては、

- ①昭和13年11月3日付の東京日日新聞夕刊
- ②当時の東京府立駒込病院の院長をしていた、父親である村山達三氏と一緒に参加した、元国立科学博物館の村山定男氏の証言。

しか見当たらない。

なお、後者は『五島プラネタリウム44年のあゆみ』の座談会記事⁽¹²⁾や渋谷星の会会報誌『しぶやの二番星』2014年1月号に掲載された村山定男氏のインタビュー記事(2013年3月30日、6月9日実施)で見られる。それだけに、今回の資料は、今まで不明だった点のいくつかを明らかにしてくれる、貴重なものである。

では、以下では山本天文台資料と、従来知られていた資料から得られる知見について、考察を試みる。

4-1. 東日天文館と山本一清の関係

先に紹介した東亜天文協会急報の記事から、山本一清は開館前から東日天文館のプラネタリウムと天文陳列館に関する顧問をつとめ、協力をしていたことがわかった。しかしながら、山本が実際にどのような協力をしていたのかについては、資料が見つからなかったもので不明である。なお、山本は1935年から大阪市立電気科学館のプラネタリウム設置にも協力しているが、こちらは山本天文台に関係資料が数多く残されている⁽¹³⁾。それに対して東日天文館に関する資料は今回発見されたごく僅かなものしか見当たらないことを考えると、あまり大きな協力は行っていないように思われる。

その理由としては、1938 年に山本をとりまく環境が大きく変化した点が考えられる。先に紹介した東亜天文協会急報の文面から見て、東日天文館の関係者が山本に協力を仰いだのは1938年3月頃の事と思われるが、直後の5月31日に山本が京都帝国大学を辞職しているのである。その後、8月にはストックホルムで開催された国際天文連盟に出席しているが、この時の海外出張で山本が横浜港を出発したのが6月19日で、帰国は9月24日であった⁽¹⁴⁾。従って、開館準備に忙しい時期に山本は協力できる状況になかったことは明らかである。加えて帰国から東日天文館の開館までは一ヶ月余りしかないので、この時点で館側としては山本のアドバイスを必要としていなかったであろう。

山本一清が開館前の東日天文館に対して大きな協力を行っていないことが推測できる資料として、昭和13年11月3日付の東京日日新聞夕刊に掲載された来賓氏名の一覧記事が挙げられる。この記事には、開館式出席者約400名⁽¹⁵⁾の中の251名の名前が書かれているが、そこに山本一清の名前は見られないのである。新聞には全員の名前は掲載されていないのであるが、そうであれば東日側が山本の名前を掲載する必要はないと判断したことが推測できるのである。

開館前後における、東日天文館と山本一清の関係については、現存資料が少ないため、以上で述べたことはあくまでも推測の域を出ないが、いずれにせよ、山本一清と東日天文館の関係は、さほど密接なものではなかったようである。山本が創設して会長を務めている、東亜天文協会(現在の東亜天文学会)の会報誌である『天界』1938(昭和13)年12月号(第19巻第212号)の表紙には、同館のカラー絵葉書を採用している。そして「本年度の会員総会 東京にて 東日館プラネタリウム見学を兼ね、初めて東京で総会を開く」という会告が掲載されている⁽¹⁶⁾。しかし、同誌1939(昭和14)年3月号には、「本会の昭和13年度総会は最初昨年12月東京に於て開催される筈であった処、種々の都合で延期され去る1月7日大阪市立電気科学館で開かれた」と書かれており⁽¹⁷⁾、東日天文館の見学は実現しなかった。これ以降同誌に同館のことは余り掲載されていないことから、その後も深い関係は構築されなかった様子が伺えるのである。

4-2. 東日天文館と東京天文台の関係について

次に、東日天文館と東京天文台との関係を見てみよう。前出の11月3日付東京日日新聞の記事から、開館式に出席が確認されている東京天文台関係者は、前東京天文台長で名誉教授の早乙女清房である。当時、天文台長は関口鯉吉が務めていたが、出席していないようである。この点から、同館と東京天文台との

関係がどのようなものであったか考えてみよう。

二人の東京天文台長就任期間は、早乙女が昭和3年3月31日～昭和11年3月31日であり、後任の関口が昭和11年4月15日～昭和14年6月27日および昭和16年3月31日～昭和21年10月12日であった。従って東日天文館の開館時に台長であったのは関口であるのだが、開館式に招待されていないのはどういうわけか不明である。戦前、関口台長の方針で台員による民間の普及雑誌への執筆を禁止したことは有名であるが⁽¹⁸⁾、当時の日本天文学会の機関誌である、『天文月報』にも同館に関する記事はないのはその影響とも考えられる。こうしたことが微妙に影響しているのかもしれない。早乙女は天文台長退任後、同年8月に退職しているが、開館式への招待状は最初から早乙女宛てに來たのか、あるいは関口に招待状が来て、代理で早乙女が出席したのであろうか。新聞に早乙女の氏名が出ているところを見ると、ふつう招待者は新聞の予定稿で準備するであろうから、代理というのはあり得ないかもしれない。

4-3. 開館記念の配布物について

山本天文台資料からは、東日天文館が開館記念として配布した資料が発見された。中でも興味深いのは、鈴木敬信が執筆し、東日天文館で販売され人気を博した冊子『星と宇宙とプラネタリウム解説』が含まれていた事である。山本天文台資料から、同書が開館式に間に合うように発刊されたことがわかったのである。

また、絵ハガキも2種類作られていたこともわかり、開館に際して手厚く準備が行われていた様子が伺える。

4-4. 開館記念天文展覧会について

東日天文館の開館時、プラネタリウムホール横のスペースにおいて、天文展覧会が開催されていた事は、従来から知られていた。しかし、その詳細についての情報は、前出の11月3日付東京日日新聞、村山定男氏へのインタビューの他には、

① 『五島プラネタリウム44年のあゆみ』の座談会記事にある、村山定男氏、原恵氏、小林悦子氏の発言

② 大谷豊和氏、河原郁夫氏のインタビュー⁽¹⁹⁾

などが知られている程度である。従って、今回発見された展覧会パンフレットは、開催期間、場所、展示品の詳細がわかる貴重なものである。

なお、東日天文館が毎月発行していたパンフレットの昭和15年3月号「三月の天文館」の表紙には、国友藤兵衛の望遠鏡と、太陽と惑星、月のスケッチが展示されている写真が掲載されているが、この写真が天文展覧会で展示していた「国友式天体望遠鏡 一基」

などを撮影したものかもしれない。今後の調査研究が必要である。

ところで、展覧会が開催された会場の名称は、今回発見されたパンフレットには、「附属館」とある。一方、1938 年 11 月 2 日付東京日日新聞の第十二～十三面には「東日天文館について」というタイトルで、東日天文館の各フロアの概略が掲載されているが、6 階については、「【六階】天文館(天象儀室、天文科学館、休憩室、開館事務室、電話交換室、貴賓室)」⁽²⁰⁾とある。ここにある天文科学館が、展覧会が行われた附属館だと考えられる。開館当時においては、名称が決まっていなかった可能性が指摘されよう。その後、天象儀紹介のパンフレット「昭和 13 年～14 年 9 月」⁽²¹⁾には、「天文参考室」とかかかれているが、同昭和 15 年 3 月から翌年 2 月までの同パンフレット⁽²²⁾では、「特別参考館」と紹介していて、以後この名称を使っており、名称が固定している。

4-5. 「東日天文館竣成記念号」について

3-2節で紹介した、昭和 13 年 11 月 2 日付の東京日日新聞第九～十六面の「東日天文館竣成記念号」であるが、今回検討したところ、筆者の一人である小川が所蔵している、11 月 5 日付の東京日日新聞号外と比較し、同じ内容であることが判明した。ただし、11 月 2 日付記念号は全 8 面であるのに対し、同 5 日付記念号は全 4 面である。両者を対照すると表 2 のようになる。

つまり、11 月 2 日号は紙 2 枚の各二つ折りで合計 8 面であるが、5 日号は紙 1 枚の二つ折りで合計 4 面仕立てとなっている。そのため、5 日号発行の際に、一部のページ数の変更を行ったのであろう。

11月2日付	11月5日付
第9面	第9面
第10面	第10面
第11面	なし
第12面	なし
第13面	なし
第14面	なし
第15面	第11面
第16面	第12面

表 2: 「東日天文館竣成記念号」の 11 月 2 日号と、同 5 日号とのページ数対照。

4-6. 山本資料の「東日天文館えはがき」について

今回の新資料の中には、3-2節で紹介した東日天文館の絵はがきセット 2 種類がある。そのうちの一方には、中にプラネタリウム投影機と土星のイラストが配置

されたカラー刷り絵はがき 1 枚が入っていた。

この絵はがきセットと同じセットは、筆者の一人である小川も所蔵しているが、そのセットにはもう一枚、「東日天文館全景」とキャプションのあるカラー刷りの絵はがき(写真 4)が入っており、2 枚セットになっている。一方、今回の山本天文台資料中には見当たらないのである。これはなぜであろうか。



写真 4: 「東日天文館全景」絵はがき

この絵はがきセットが 2 枚組であることは、小川所蔵資料に、2 枚共に 13 年 12 月 6 日の日付があるスタンプが押されていることから想像できる。また東日会館の 1 階と 6 階に売店があったことは、東日天文館編集で野尻抱影並びに天文館研究室同人著『天文読本』の巻末に売店案内の広告が記載されているが、小川が直接、大谷豊和氏にインタビューしたところ、「6 階の売店に 3 種類の東日会館記念スタンプが置いてあった」と証言されている。

従って、開館からわずか一ヶ月後である 12 月 6 日付のスタンプ印がある同絵はがきセットは、11 月の開館時には既に 2 枚組として作成され、披露開館式の 11 月 2 日には、山本一清らの来賓に配布されていてもなんら矛盾は無い。

一方、山本一清が「東日天文館全景」の絵はがきを所蔵していたであろうことは、東亜天文学会の会報誌である『天界』昭和 13 年 12 月号の表紙に、東日天文館全景の絵はがきが使われていることから想像できる。従って、この絵はがきセットは、やはり 2 枚組であったが、建物全景のはがきの方は、山本が『天界』表紙に使用する際に抜き出し、その後印刷所の手に渡ったままになったか、または山本の手に戻った後に別の場所に移され、保管されたのではなかろうか。

5. まとめ

以上、山本天文台資料から発見された、東日天文館関連資料から、1938 年 11 月 2 日の開館式の様子を詳しく知ることができた。今回の調査により、他にも興

味深い事柄が明らかになったが、紙面の都合もあり、別の機会に譲ることとする。

また、今回発見された資料では、全貌をつかめなかった問題点もいくつかある。例えば、木辺成麿氏が製作した鏡が展示してあったことは有名であるが、今回の資料に出てこなかった。また、東日天文館の展示場に飾ってあった日本最古の星図として有名な「格子月進図」については、日本天文学会発行の『天文月報』1942(昭和)17年6月号で井本進氏が同館で発見した経過などについて紹介しているが、新資料の展示品リストを見る限り、該当はないように思える。これらは、さらなる調査が必要である。

東日天文館については、既存資料が少ないため不明な部分が多いが、山本天文台資料の発見は、まだ知られていない、いくつかの点を明らかにする重要な発見と言えよう。今後も調査を続けていきたい。

最後になりましたが、資料調査に際して、京都大学宇宙物理学教室(当時)の富田良雄氏には多大な協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

註

- (1) 「東日天文館の思い出 -河原郁夫先生にお聞きました-」、『渋谷の二番星』、2014年10月号、5ページ、渋谷星の会、2014年。
- (2) 山本天文台資料「東日天文館開館記念式典関連書類(昭和13年)」(資料番号 2obs1f-57-8)中の東亜天文協会急報第283号、1938年3月21日付。
- (3) 前掲(2)「東日天文館開館記念式典関連書類(昭和13年)」中にある。文面は以下の通り。

拝啓 益々御清祥之段奉賀候

陳者先般来建築中の東日会館この程竣成し同館に設備の東日天文館完成致候に就いては開館式を挙行致し同館備付のプラネタリウム(天象儀)を貴覧に供し度候間御多用中御迷惑とは存候得共来る十一月二日午前十時有楽町東日会館へ御来駕賜り度此段得貴意候

昭和十三年十月 日

東日会館専務取締役
前田久吉

山本一清殿

追て準備の都合も有之御来否別葉にて返信願上候

- (4) 前掲(2)。
- (5) 前掲(2)。
- (6) 前田久吉(1893~1986)は、東日天文館のプラネタリウム設置を進めた中心人物で、自著『日々これ勝負』(1953年、創元社刊)で建設の経過を述べている。
- (7) 前掲(2)。昭和13年11月3日付東京日日新聞

夕刊第一面。

十時廿分今尾本社営業課長の司会で開式、本社取締役会長高石眞五郎氏及び東日天文館建設会長鈴木孝雄大将それぞれ別項のごとく式辞を述べ、東日会館専務取締役前田久吉氏の建設経過報告の後、近衛首相(横溝内閣情報部長代理)荒木文相(岩松文書課長代理)米内海相(小池水路部長代理)オット独逸大使(ド・ラ・トロブ情報官代理)の各祝辞(第三面掲載)代読祝電の披露があり、閉式、十一時より帝都唯一、且つ最初のプラネタリウムを実験観覧に供し、大ドームに人口宇宙を再現して来賓諸氏から称賛を博した。正午から八階大食堂を開き(以下略)

- (8) 前掲(2)。昭和13年11月3日付東京日日新聞夕刊第二面。
- (9) 前掲(2)。昭和13年11月3日付東京日日新聞夕刊第一面
- (10) 前掲(2)。昭和13年11月3日付東京日日新聞夕刊第二面
- (11) 前掲(2)。天文展覧会出品目録
- (12) 天文博物館五島プラネタリウム編『五島プラネタリウム44年のあゆみ』6~11ページ、天文博物館五島プラネタリウム、2001年
- (13) 嘉数次人、「電気科学館のプラネタリウム導入と山本一清」、『大阪市立科学館研究報告誌』第26号、11~18ページ、大阪市立科学館、2016年
- (14) 山本一清「急ぎの欧米旅行より帰って」、『天界』第19巻第211号、2ページ、東亜天文協会、1938年。
- (15) 前掲(2)、昭和13年11月3日付東京日日新聞夕刊第三面には、「披露開館式は菊薫る日本晴れの二日午前十時から朝野の名士約四百名出席のもとに…(中略)…挙行された」とある
- (16) 『天界』第19巻第212号、目次ページ、東亜天文協会、1938年。
- (17) 『天界』第19巻第215号、152ページ、東亜天文協会、1939年
- (18) 日本天文学会百年史編纂委員会編『日本の天文学の百年』、257ページ、恒星社厚生閣、2008年。
- (19) 大谷豊和氏へのインタビュー記事は、「大谷豊和先生にお聞きました」、『渋谷の二番星』2009年1月号、4~7ページ、渋谷星の会、2009年。河原郁夫氏へのインタビューは前掲(1)、2~5ページ。
- (20) 前掲(2)。昭和13年11月2日付東京日日新聞第十二~十三面
- (21) 小川所蔵
- (22) 小川所蔵

表1:「開館記念 天文展覧会出品目録」に記載された展示物リスト

東京 尾島碩宥氏蔵	
司馬江漢地輿儀図	一軸
須弥山之図	一軸
須弥山儀図	二軸
風船式地球儀	一点
平天儀	一点
平天儀図解	一冊
天文図	一軸
地球万国山海余地全図説	一枚
中国描談	一冊
図書編二十九卷(明章漢本)	一冊
更紗地世界図	一枚
回照儀	一点
天文測量図(高橋景保作)	一卷
星図(安井春海作)	一点
静岡 静岡県立葵文庫蔵	
長慶宣明曆算法六卷(安藤有益著延宝四年刊)	二冊
仏国曆象編五卷(文化七年刊僧門通著)	五冊
ランデ天文書	九冊
ゾメル宇宙書	六冊
オランダ実用国民曆	四冊
オランダ曆書(一八六二年)	一冊
フムボルトノ宇宙学概説	三冊
天文及地文の会話的記述	四冊
天体距離表	一冊
東京 高森寛治氏蔵	
高森観好翁画像	一軸
同翁作星座図	一軸
風雨説(観好稿)	一点
略天儀	一冊
浮世絵志	二冊
象限図説	一冊
星表図説	一冊
渾天儀略図	一点
経緯簡儀用法(上中下)	三冊
東京小石川区林町 徳川宗敬氏蔵	
簡天儀	一点
現微鏡	一点
千葉 伊能家蔵	
伊能忠敬翁遺品測觔定分儀	一点
同 方位盤	一点
同 鸞翼羅鍼	一点
同 垂揺球儀	一点
琵琶湖地図	一枚
象限儀(写真)	一枚
東京上野公園 帝室博物館	
天体儀	一点
海軍水路部	
金星試験顛末	一冊
観象台沿革	一冊
星林分図 一八六三年	一冊
海軍観象台写真	一枚
航海年表(寄贈)	一冊
潮汐表A、B(同)	二冊
航空年表(同)	一冊
太陽位置表(同)	一冊
太陰位置表(同)	一冊
新高度方位各表(同)	一冊
新天文航海表(同)	一冊
航海参考図(天図)(同)	一枚
時刻帯図(同)	一枚
サムナー氏経緯度用図(同)	一枚
位置記入図(同)	一枚
星座盤(同)	一個
各地潮汐比較図(同)	一枚

大阪 岩橋弥造	
竹筒望遠鏡	四点
一閑張遠鏡	三点
平天儀図解	一冊
サイクツモリ	二点
弟子入誓約書	八点
岩橋善兵衛翁道具箱(遠眼鏡細工場にて常用したるもの)	一点
千葉 大野省三氏蔵	
環海異聞	十六冊
東京都 秋岡武次郎氏蔵	
徳川時代初期の天球儀	一点
徳川時代(中期以前)の天球儀	一点
星図(寛文十年、安井春海作)	一点
天文分野之図(延宝五年、安井春海作)	一点
星図(元禄年間、安井算哲作)	一点
明治五年太陽曆制定以前における我国の太陽曆	一点
太陽曆(文久二年、福田泉作)	一点
万国普通曆(万延二年、幕府司天官洪川景佑著)	一点
安政四年の西洋略曆(松濤軒梓)	一点
文化三年の太陽曆(本多魯鈍齊)	一点
明治六、七、八、十年の太陽曆(東京大阪頒曆商社)	一点
明治六年癸酉太陰曆 文部省天文局	一点
明治四年太陰曆(大学曆局)	一点
明治四、五、六年の大形曆	一点
明治三年の奈良曆	一点
安永八年己亥の伊勢曆	一点
天保四年癸巳の奈良曆	一点
嘉永三年庚戌年三嶋曆	一点
慶応二年丙寅江戸曆	一点
天保四年七曜曆	一点
文化十三年の金澤曆	一点
文化十四年丑大阪懷中曆	一点
享和三年会津曆	一点
弘化三年京都曆	一点
文政十三年の弘前小曆	一点
慶応二年の万曆両面鑑	一点
慶応三年の仙台曆	一点
文化三年の本多魯鈍齊校訂曆	一点
明治四年南部絵曆	一点
明治二十二年の南部絵曆	一点
明治二年の伊勢曆	一点
明治二年の東京曆	一点
分野星図(嘉永二年、高橋信行著)	一点
分円星図(文政九年、福山石坂常堅)	一点
幕末の錦絵に表れたる武者絵中の渾天儀	一点
徳川幕末の錦絵に表れたる武者絵中の渾天儀	一点
滋賀 国友茂氏蔵	
国友式天体反射望遠鏡	一基
天保六年年日月星業試図	一冊
申年四月廿六日夜星之図	一枚
天保七年八月十五日五ツ時過窺	一枚
九日月の図	一枚
惑星比較模型	
星座説明模型 八個	
日月食の説明模型	
日時計 七個	